

## 『社会言語科学』特集論文募集のお知らせ

学会誌編集委員会では、以下の要領で特集「共生」を問い直す社会言語科学」の論文を募集いたします。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。

なお、特集では最終投稿期限が設定されていますのでご注意ください。投稿論文は基本的に投稿され次第、査読作業に入ります。したがって、より早く投稿された論文ほど、査読が早く済み、論文を修正する機会が多くなります。最終投稿期限は特集論文の投稿を受け付ける最終期限という意味ですので、早く投稿できる方は早めに投稿されることをお勧めします。刊行時期までに採択とならないときは、特集号以外の号に掲載されることもありま

特集論文の最終投稿期限：2020年9月30日（水）

掲載号の発行：2021年9月（第24巻第1号に掲載予定）

特集論文の投稿先：電子投稿システムを通じて投稿してください

（本学会HPの「学会誌」ページ参照）

---

タイトル：「共生」を問い直す社会言語科学

担当エディター：

鄭 惠先（北海道大学）

筒井 佐代（大阪大学）

平田 未季（北海道大学）

義永 美央子（大阪大学）

近年、母語や国籍、宗教、職業や雇用状況、年齢、性的指向、身体的・情緒的または知的なディサビリティやハンディキャップといった様々な面において、社会の構成員の多様性がますます可視化されつつある。特に2018年から2019年にかけて、入管法の改正による新しい在留資格の創設、「日本語教育の推進に関する法律」の施行、参議院選挙での障がいを持つ候補者の当選など、様々なバックグラウンドを持った人々が共に生きる社会のあり方を改めて考えさせる出来事が次々に起こっている。このような現代社会において、社会と言語の関わりを研究する私たちはどのような貢献ができるのだろうか。本特集号では、「共生」という概念をキーワードに、マイノリティとマジョリティという二項対立的な捉え方から脱却し、多様な文化的社会的背景を持つ他者同士が、互いに認め合い関わり合いながら共に暮らす社会のあり方を考える上で、社会言語科学の研究に携わる者として、どのような立場に立脚するべきか、またどのような新たな視座を提示できるのかを考えたい。

従来から、社会言語学会は「社会の福利に資する」ウエルフェア・リングイステイクスの実現を目標に掲げている。『社会言語科学』においても、これまで直接的・間接的に共生に関連する特集がいくつか組み込まれてきた（例えば、第13巻第1号（2010年）特集「日本社会の変容と言語問題」、第16巻第1号（2013年）特集「ウエルフェア・リングイステイクスにつながる実践的言語・コミュニケーション研究」、第17巻第1号（2014年）特集「多言語社会日本の言語接触に関する実証研究」など）。本特集号では、こうしたこれまでの研究の蓄積を踏まえつつ、「共生」に関連する今日的課題に取り組む研究を歓迎する。

「共生」というテーマを改めて取り上げるのは、現実に共生への取り組みが進む一方で、共生が叫ばれるほど逆行する動き（ヘイトスピーチなど）が激化したり、共生のための取り組み自体がマジョリティとマイノリティという二項対立を強化したりするといった、皮肉な状況が見受けられるように、「共生」というスローガンが掲げられても、それを実現することが難しい現状があると考えられるからである。

このような状況が生じる一因として、「共生」を語る際に用いられる「日本人」「外国人」あるいは「障がい者」「健常者」などのカテゴリーを表す言葉によって、カテゴリー内での多様性が看過され、結果的にステレオタイプによる見方が固定化されるといったことが指摘できる。「言語権」に関する議論においても、外国人年少者の母語保持の権利保障のように、常に社会的弱者の権利と受け入れ社会の義務という側面から論じられることが多い。そのような二極化した議論ではなく、普遍的な人権の問題として「言語権」を取りあげて相互承認の過程として捉え直すためには、既存のカテゴリーに安易に囚われることなく、多様性に満ちた現実を捉えるための新たな視座を獲得することが必要であろう。近年、複言語・複文化主義的な価値観、複言語意識の重要性が強調され、個人の中に複数の言語・文化が存在することを認める考え方も浸透しつつある。現実の状況が刻々と変化していくこの時代において、多様性を包摂するインクルーシブな社会を構築していくためには、多様な個人が集まった多様な共同体における「共生」の実態を知り、「共生」の概念を当事者の視点から改めて問い直し、すべての構成員にとって暮らしやすい社会を構築していく方法を模索することが求められていると考える。

共生に関するこのような現状を踏まえ、国内外における、様々な面での多様性を持った人々の共生の現状、取り組みを批判的に検討する意欲的な研究を歓迎する。本文の冒頭で、母語や国籍、宗教、職業や雇用状況、年齢、性的指向、身体的・情緒的または知的なディサビリティやハンディキャップなどの多様性を指摘したが、本特集号ではこれにとどまらず、様々な面で多様性を有する人々の共生を取り上げたいと考えている。ウエルフェア・リングイステイクスの観点からは、「弱者や少数派の話者の言語的差別の是正のためだけではなく、多数派を含むコミュニティの全構成員を豊かにする」という視点の重要性が指摘されている（平高 2013）。そうした視点を現実化するにはどうすればよいのか、地域社会、施設、学校などの現場での取り組みに注目した実践的観点、および学際的観点から論じることも重要であろう。多様な領域・観点からの論考が集まることによって、学術上の「共生」のあり方をも示す特集号になることを期待している。

#### 引用文献

平高 史也 2013. 「ウエルフェア・リングイステイクスから見た言語教育」『社会言語科学』16 (1), 6-21.